

---

# 月光の囁き

こもれび

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月光の囁き

### 【NNコード】

N9013D

### 【作者名】

こもれび

### 【あらすじ】

月は、今も僕を見つめている・・・

「父さん、月が追い掛けて来よるよ」

祖母の家に遊びに行つた帰り道、月光の照らす山道を車で走つていた。

兄と姉は遊び疲れたようで、リクライニングを倒した後部座席で寝ている。

「ん？ 何でや？」

「そいけん、月がこいつちば見よるんよ」

父はヘッドライトが照らす山道の先を見つめたまま、僕の言葉に耳を傾けてくれた。

この当時から思つていたのだが、こういう帰り道の父親といつもの  
はとても大きく見える物だ。

皆が寝静まつた車内で唯一人黙々と車を運転する姿で、僕は密かに  
憧たりしていた。

「ん~月が、かあ」

月を見上げることなくそう言った。

当然、運転中なのだから仕方ない。

僕はとひつと、助手席に膝立ちになり、かじりつぶよひに窓に見入つていた。

ひつてマジマジと月を見てみると、月明かりとは中々明ることに気がつく。

人工の明かりとも太陽の光とも違う、怪しげな、それでいて美しい独特的の光を放っていた。

「ほら、全然距離が変わらんつちや もん」

車の窓をどんどん流れしていく景色とは裏腹に、夜空に浮かぶ月だけが僕らを追跡するかのように寸分違わぬ距離を保っていた。

「あつ……！」

その時

車が山を通りトンネルに入った。

視界が突如として強いオレンジ色に埋め戻される。

トンネルに入ることなど普段は何ともないのに、あまりに突然のことで僕はぱつっとしてしまい、トンネルを出るまでずっと変わらず窓の外を見上げていた。

しばらくしない内に、大して長くないトンネルを抜ける。

「えいや、まだお母さんは追い掛けで来よるや？」

バックミラー越しに僕を見る父。

今思い出して見ると、この時の父は相当悪戯っぽい笑みを浮かべていたような気がする……まあ、その頃はそれに気付く由もなかつたのだけれど。

「まだ、まだあるー！」つづれば見る

「ほーか、そいなうこれでどうがんやーー！」

父がそう言った瞬間、グーッと重力が体にかかるのを感じ、座席に押しつけられるような格好になった。

スピードがグンと上がったのだ。

制限規則は……たぶん破つていただろう。

視界を流れしていく景色が一層速さを増す。もつ景色といつよつは、たくさんの『線』が移り行くよつな感覚だつた。

「まだまだ、ずっとこいつらばー！」

興味は既に興奮に変わっていた。

父も僕も悪乗りし易い質で、その後しばらく、帰宅そつちのけで山道を激走した。

途中、兄や姉が起きてしまつのは？

という心配が浮かんだが、それは不思議な雰囲氣と、静かに遠くから、だけど耳元から聞こえてくるような月光の囁きで、いとも簡単に消え去つた。

そう、興味は興奮に変わっていた

僕はもう円に……月が放つ怪しげな光に完全に魅了されていた。

今僕の視界に映る景色は、月と同じようにしっかりと見えていた。

あれからじばりへ車を走らせた後、僕と父さんは山の中腹にある展望台に来ていた。

そこでもやはり、動かなくなつた僕達のまゝ、月も同じく止まり、変わらず僕に囁き続けていた。

姉と兄は、止めてある車の中で眠っている。

「お月さんはほんなごて速かばい」

「そうやね、僕達車に乗つとったのに

崖先を囲うように作られた柵に、僕は伸ばした両手を、父は肘をつくようにして空を見上げていた。

その時、鼻を煙たい匂いがかすめる。

いつの間にか、父は煙草を吸い初めていた。

父が家族の前で煙草を吸う事はひどく珍しい。

「一本、一本だけな?」

僕がじつと見つめていたことに気が付いたのか、父はバツが悪そうに笑つてみせた。

ふうへ、と父がはいた煙は、月に薄くかかる雲のよつに空に舞い上がり、そしてすぐに消えていく……。

母が死んでから、父は家族に氣を使つようになった。

以前は家庭をあまり顧みない人だった……といつても、決して父親として失格だつた訳ではない。

怒るときはしつかりと叱ってくれたし、どこかに連れていってもくれた。

だから、僕ら……もちろん兄も姉も含めて、父に責任があるなどと露とも考えていない。

でも、父自身は責任を感じ自らを戒め抑制するよつになつた……。煙草もその中の一つだった。

母が死んでからの父はどうかよそよそしく、遠慮がちだつたが……久しぶりにこの煙草の匂いを嗅ぐと、やはり父さんなんだな、と感じる。

「お母さんはな……」

先が赤々と燃える煙草を指に挟んだまま、父が口を開いた。

「父さん達ば見張りよるどよ」

「見張りよる？何ば？」

「全部や。悪か！」と叫ぶか！」と叫ぶ全部」

「そ、そがん！」としてぞくりるとね

二。一はばねたはのアリス

なんだか複雑な表情のまま、僕らを監視しているという風を眺めていた。

「別」。どうせんもせん。……でも見張つよる、こいつか、どうじる

なんだか僕も変な気分になつて、父に習つよつにして月を見上げる。

その時、ふと思いつく。

「じゃあ、喧嘩はنجガんじとね。円は見えなば」

自信満々だった。

これで、せつときからじわじわと沸き上がるよくわからない感情を払拭出来ると思った。

「そこまへいが見えたんだな。喧嘩も円は空から俺達ば見る」

……信じられなかつた。

月と太陽は交互に空に上がるので……ずっと西北に向つてこたのこ。

昼も……夜もずっと円は見ている。

浮かびつつある漠然とした何かが、足音を起して近づいてくるのがはっきりとわかった。

それでも

「じ、じゃあ、僕も円のことが見てやるつたい。全部裸無く見てやる。それでおあこじまばこ

べりしても否定したかった。

一度認めてしまえば、もつ一度と円の枚配から逃れられないような気がしてならなかつた。

「お円さんはそれも許してくれん。お円さんは、ずっと正面だけをひざむに向けとるからな、円の裏側は誰も見たことがない」

「へ、嘘だあ。だつて、円はぐるぐる回つよるもん。だけん円の形は変わらつたい」

子供の頃は、きっと誰かが思つていたに違ひない。  
僕もそつだつた。

「まだお前には難しかかもしれんな」

そう言つて、父はあと少し残つていた煙草を携帯灰皿に押し込んだ。

「ほり、もつ帰りつ。段々肌寒くなつてきたけんが

まだ腑に落ちない僕を余所に、父はすんすんと車に帰り始めた。

僕も、慌ててその後を付いていく。

後ろから、月明かりが囁きかけてきたけど、もう僕は振り返らなかつた。

さつきまで漠然としついた感情が、今では手にとるように分かる。いや、手に取るではなく、僕がそれに支配されつづつあった。

興奮は、恐怖に変わっていた

帰りの車の中、相変わらず一人運転する父を余所に、僕は狸寝入りをしていた。

窓に顔を背けるような態勢。

頬を月明かりが照らしていることが、目蓋を通して感じられる。

もつといきのよつといひもつといきのこと、追い掛けてくる月を見上げること出来なかつた。

どこまでも振り切れず、何もかも見つめる月は、もつ恐怖の対象でしかなかつた。

僕が嘘寝をしながら恐怖に震えることを知つてか知らずか、父は一言

「でも、お円さんは綺麗やね……」

と言つた。

それは、まるで月光の囁きのよつなか細い響きだった。

恐る恐る、寝返りをうつフリをして見上げた夜空。

先程と変わらず空に浮かぶ月は、確かに美しかつた

僕は大人になつた。

毎日が忙しく、もつ空を見上げることも少ない。

大きくなり、色々なことを知り……。

世界はつまらないものになつてしまつた。

何も不思議に思ひことはない。

何もかもを理由付けし、理解しようと/or>する。

もし理解出来なくとも、わかつたフリして誤魔化して、それでもダ

メなら田を騒り……そんなの嘘だと無視をする。

僕はつまらない大人になった

たまに夜空を見上げてみると、あの田のこと思い出す。

理論はもう理解している。

でも

すべてを理解し、大人になった今でも、月が僕を見張っているような気がしてならない。

今もあの田と変わらずに、僕の耳元で、月光は囁き続けている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9013d/>

---

月光の囁き

2010年10月20日17時49分発行